

# 令嬢 捜査官 洗脳計画

抗えぬ  
美態調教

小説 上田ながの

挿絵 長頼



序章	令状を持った令嬢捜査官	006
第一章	事の起こり	017
第二章	お嬢様、お風呂の時間	051
第三章	アナル奴隷なご令嬢	073
第四章	お嬢様の慰労会	095
第五章	みんなの前でお漏らし	127
第六章	わたくしは男ですわ	158
第七章	事件の黒幕	194
終章	わたくしの愛しい人	235

## 登場人物紹介

Characters



### ほうおういん さくら こ 鳳凰院 櫻子

捜査官にして鳳凰院家のお嬢様。捜査課所属の女性犯罪専任捜査官として性犯罪がらみの事件を追う。令嬢らしくわがままや大胆な行動も多い。



しばの たかふみ

### 柴野 鷹文

櫻子に酷い扱いを受けつつも、彼女のことが好きであり捜査官となった幼なじみ。彼女をサポートする。

ほそかわ なつひこ

### 細川 夏彦

櫻子が以前から追っていた連続強姦事件の参考人として招致される、カウンセラーの男。

ぬまさわ りょうすけ

### 沼沢 良介

捜査官の同僚。捜査課に所属し、櫻子を助けようとする。

しばうら

### 芝浦

捜査課課長。わがままな櫻子にいつも頭を痛めている。

ほうおういん ごうぞう

### 鳳凰院 剛蔵

櫻子の父親。彼女を溺愛している。

思わず櫻子は悲鳴を上げる。男なんか屑だと思っっているお嬢様にとって、初めて見る実物の勃起ペニスだった。

(な、何？　べ、ペニス？　これが……)

以前犯人から押収したアダルトビデオに映っていたもの以上に醜い。それに酷く臭い。ただズボンから出しただけだというのに、腐った生ものような匂いが取調室に漂い始めた。嗅ぐだけで表情が歪む。

「何をじゃないですよ。体液を搾るんですよ」

細川は笑う。小馬鹿にされているような気がして気に入らない。

「も、勿論分かっていますわ。た、ただ、突然だったから驚いただけです」  
だから自分は動揺なんかしていないと強がってみせる。

「これでも協力してるつもりなんですけどね。その、無理なようでしたら止めますか？」  
こちらを見つめながら問いかけてくる。

「だから、驚いただけですわ。無理なんかありません。す、すぐに始めますわ！」

黒々とした細川の瞳を見つめていると、何故か気持ちが大きくなってきた。というよりも、このまま引き下がれないと本気で思う。

(これは捜査なんだから当然のことじゃない。この程度のことができなくて、女性犯罪専門捜査官は名乗れませんわ)

お嬢様はフンツと鼻を鳴らし、椅子に座った細川の前にしゃがみ込む。これでも今年で

二十四歳。一度も男と付き合ったことはないけれど、知識くらいは持っているのだ。

「別に貴方に感謝はしませんわよ。これはあくまでも捜査の為に必要なことなんですから。協力して当然なんです。貴方もそれをよく理解しておきなさい」

「勿論。分かっていますよ」

細川がにやけ面で頷く。気に入らない表情だった。

（貴方の罪をこれで曝あはいてやりますわ）

そんな男の顔を見つめながら心の中に強い決心を抱くと、躊躇あはい一つも櫻子は勃起したペニスへと手を伸ばす。

「あ、熱い……」

触れた途端、掌に肉棒の熱気が伝わってきた。燃え上がるような熱を感じる。ビクビクと掌の中で肉茎が震えるのがよく分かった。想像以上に硬い。思っていた以上に不快な感触だ。すぐにでも離れたい。

（でも駄目ですわ。わたくしは逃げるわけにはいきませんの。た、確か……こう……）

男を遠ざけてきたお嬢様にとつては無縁な行為だった。けれど、女性犯罪捜査官として得てきた情報が脳内にフラッシュバックしてくる。女が男に奉仕をする汚らしい姿だ。本来ならば思い出したくもないそんな知識を総動員する。

肉根から肉茎、カリ首、亀頭へと掌で摩擦を与えていく。一度抜くたび、ペニスはヒクッヒクッと反応し、僅かではあるがその大きさを増していった。

「拙い手つきですね」

からかうような言葉が向けられる。

「……少し黙ってなさい」

そんな男に一言だけ返し、肉槍を何度も擦り上げる。熱気も硬度も増しているように感じた。更に――

じゅくつ！

「ひっ！ な、何か、何か出てきましたわ!!」

肉棒の先端部から半透明の液体が漏れ出す。掌に絡みつく粘液。反射的に手を離すと、ねっとりとした糸が肉先から指の間に伸びた。

「どうしました？ ただのカウパー汁じゃないですか」

「……わ、分かっていますわそんなこと！」

本当は頭が真っ白になりそうなくらいに混乱していたが、櫻子は必死に声を張り上げ、髪を掻き上げることによって何とか冷静さを維持しようと努めた。

再び肉棒を握る。先走り汁によって先程以上に不快な感触だった。それでも（捜査の為なのよ）と扱きを再開させる。

ニチャツニチャツニチャツ！

肉茎全体に広がる液体。ペニス自体が体液で濡れそぼり、妖しく輝いて見えた。掌が肉胴を擦り上げるたび、淫らな水音が響いて聞こえる。すべてが櫻子に不快感を覚えさせた。

「どうしました？ そんな手で擦ってるだけじゃ、いつまで経っても終わりませんよ」  
だというのにまるで肉棒は射精する様子を見せない。細川の表情も余裕のものだった。  
「扱く以外にやり方を知らないんですか？」

呆れたように細川は肩を竦める。こちらの無知を嘲るような気に食わない態度だった。馬鹿にされることは我慢できない。櫻子は「わたくしを舐めるんじゃありませんわ」と声を上げると、ぎらぎらした瞳で肉棒を睨み付けた。

(……この程度のこと。わたくしにできないことなんかないんだから！)

恥ずかしいなどと考える必要もない。何故ならこれは捜査であり、当たり前前の行動だからだ。問題などあるはずがない。櫻子はその艶やかな唇を開き、舌を肉先に伸ばした。

くちゅっ……。

「に、苦い……」

肉先を舌で舐める。味覚が痺れるような苦味が伝わってきた。普段美食ばかりの櫻子にとつては耐え難い味である。が、だからといって逃げることなど矜持が許さない。

(た、確かこうやって……)

ぺちゅ、ちゅる、くちゅる、ぺちゅう……。

「んっんっんんん」

苦味に必死に耐えながら、何度も亀頭部を舌で舐め回した。肉先の秘裂をなぞり、裏筋を舐め上げる。勿論舐めているだけでは射精まで導けない。舐めると同時にチュッチュッ

と震えながら亀頭にキスをし、遂には口を開いて肉棒を啜えた。

「むぼっ！ んぼおっ！」

臭みが口腔に広がる。噎せ返るような匂いに咳き込みそうになったが、それは耐えた。少しでも弱い姿は見せたくない。

（これは捜査。捜査の為なんだから……）

何度も自分に言い聞かせ、今度は唇で肉棒を扱き始めた。顔を前後に振り、舌を肉棒に絡ませる。すべてがあまりに拙い動きだったが、櫻子は必死だった。屈辱のあまり、身体は震えている。

ジュボッジュボッジュボッ！

「んぐっ！ ふもっ！ んもおっ!!」

それでも頬を窄め、ペニスを吸う。頭を前後に振るたび、分泌された唾液が唇の端から溢れ出し、顎を伝って流れ落ちていった。

「ああ、いいですよ。なかなか気持ちいい」

そんな櫻子に対し、細川が悦びの声を向ける。それを証明するように、口腔内の肉棒は更に肥大化していった。特に亀頭部は破裂しそうな程である。

「あ、あなふあを、よろこばしえるたむえでふあ——んぶっ！ もぶうっ！ ぶっ！ ぶぶっ、うぶうっ!!」

これは捜査である。喜ぶ細川が許せない。だから抗議をしようとしたのだが、それを遮

るように細川自身が腰を振ってきた。こちらに対する配慮などまったくくない。自分の欲望のみを追い求める動きだった。

じゅごっじゅごっじゅごっ！

「ふぐっ！ むぐっ！ んぐぐうっ！」

何度も喉奥を肉先が突く。食道にまで届いてしまうのではないかという程の勢いに、吐き気すら込み上げてきた。あまりの苦しみに眦には涙が浮かぶ。しかも、口腔を犯す肉棒は、一突きごとに大きさを増していく。

外側に捲れ返る唇。フワリとした髪が揺れる。

（くるっし……。い、きが、つまるっ！ お、大きくて、ペニスで、喉を塞がれてる!!）

口内に無理矢理腐りかけたズッキーニを突き込まれているかのような感覚だった。鼻先に男の下腹部が当たると、縮れた陰毛の感触が、不快感をより増幅させた。

「んぽっんぽっんぽっんぽっ！」

ちゅく、くちゅる、じゅちゅるるるう……。

それでも必死に櫻子は肉茎に舌を這わせ、頬を窄めてペニスを吸う。

（せ、精液を採取して、ひ、被害者達と同じように……）

想いはそれだけだった。これは捜査の為なのだ。

「いいぞ。射精。たっぷり射精すぞ」

そんな令嬢捜査官の想いが実ったのか、細川が限界を告げてくる。同時に口腔内の肉棒

がビクビクッと何度も震えた。熱気と硬度、そして臭気が増し――

びゅぶるっ！ どびゅっ！ びゅぶるるるっ！

「――ふぶおっ！ むぶっ！ うぶええええっ！ うげ、げえええっ！」

口腔内に向かって大量の白濁液が撃ち放たれた。ドクンドクンとポンプのように震えるペニス。熱液が一瞬で口腔内を埋め尽くす。

（で、射精てる！ 臭いのが……臭くて熱いのが射精てるっ!! 不味い。不味くて苦い!）  
あまりに不快な味だった。先走り汁を舐めた時以上の苦味を感じる。見開かれる瞳。口端からビュブポツと口腔に収まりきれない白濁液が溢れ出した。

「ふう……。拙いものでしたが、悪くはありませんでした。これならすぐ上達しますよ」  
嬉しくない褒め言葉と共に、ジュポツと肉棒が引き抜かれる。

「うえっ！ げろっ！ うおえええっ！」

その途端、櫻子はお嬢様とは思えない無様な声を上げ、撃ち放たれた精液をすべて吐き出した。ポタポタと白濁液が床に落ちていく。一部はスーツにもかかり、汚い染みができてしまった。口の中が粘つき、気色悪い。

「駄目じゃないですか零しちゃ……。いや、別にいいか。だってほら、まだまだ私は射精  
せませすからね」

そんなこちらの姿を見て、細川が笑いながら肉棒を突きつけてくる。大量射精をしたというのに、まるで衰えていない。



語りながら細川はショーツの上から櫻子の肛門を触ってきた。指先でグニグニと弄ってくる。尻に与えられるその刺激に、ヒクツヒクツと櫻子は僅かに震えて身を固くした。

(……お尻？　　そ、そんなところは……)

汚い場所だ。排泄をする為だけの器官である。細川の言葉が信じ難かった。が、同時にこれで処女を守ることができると、どこかホツとする心も生まれていた。それに仕事も果たせる。

(……す、少し我慢するだけですわ)

抵抗感はあるが、背に腹は代えられない。

「わ、分かりましたわ。わ、わたくしのお尻で、皆さんを気持ちよくさせてあげますわ」  
覚悟を決めると櫻子は自らショーツを下ろした。男達の眼前に、自分の大事な場所が晒されてしまう。

「じゃあこれを……。そのままじゃ挿入することはできないからね。自分でたっぷり解してくれ」

細川がローションを手渡してきた。

(……これを使う……?)

今まで見たこともない物である。好奇心と自分が置かれている状況に胸を高鳴らせながら、それをゆっくり掌の上に出した。ネチヨネチヨとした液体が指に絡んでいく。

「こ、これを潤滑液にすればいいのですよ？」

「そういうことだよ。ほら、そこに手をつけて、こっちに尻を見せながらやれよ」

男の命令に従い、櫻子はその場で四つん這いになった。

（大丈夫。く、悔しくなんかありませんわ。こんなの何でもありませんの）  
櫻子は自分自身に何度も言い聞かせると、自らの肛門にローション塗れの手を伸ばす。  
ちゅくつ！

「んくつ！ つ、冷たいっ！」

冷えた感触に一瞬手を離れた。が、すぐに（我慢ですわ）と言い聞かせると、自身の肛門に指を入れる。

「んくつ……くつ……んんんんくつ！」

普段出す為だけの器官に潜り込む異物感。指を一本入れただけだというのに、身体が裂けてしまうのではないかとすら思う。そんな感覚に必死に耐えつつ、櫻子は自分の指で直腸を掻き混ぜていった。

じゅぐつぐじゅつぐぶじゅぐつ、じゅぽおつ！

「ふぐつ！ んあつ、ふつふつふううう……」

ローションがアナルに染み込んでいく。指の挿出入を繰り返し、小さな菊座を徐々に拡張していった。尻肉が外側に捲れる。指で腸壁を摩擦するたび、排便時に似た快楽が身を駆け抜けた。

（見られている。こんなはしたない姿を……）

男達はギンギンと目を見開き、こちらの痴態を見つめてくる。視線が全身を舐め回しているかのように感じた。身体が熱くなってくる。

「み、見るんじゃありませんわ。これは見せ物では……んっんっ……ありませんのよ」

やるべきことは男達を満足させ、情報を得ること。痴態を見せることではない。ただ、そんな言葉を吐きつつも、腕は動き続ける。まるで濡れそぼった膣口のように肛門は開き、直腸までが覗き見えてしまっていた。

「な、何が見るなだよ。尻の穴をそんなに広げてよお！ こ、こんな我慢できるか!!」

それを見た男がこちらの身体に飛びついてくる。両手で腰を押さえると、勃起棒の先端部をぐしよぐしよになった菊座に宛がってきた。

ちゅぐつ！

「ひっつ！ ま、まだ、まだ駄目ですわっつ!!」

肉棒の熱気が伝わってくる。心の準備などまったくできていなかった。慌てて櫻子は男の行為を止めようとするのだが――

ミヂツ！ ミヂミヂミヂイツ!!

「ひおっ！ おっ、おっおっおほおっ！ は、挿入<sup>はい</sup>って、わ、わたくしのお、尻に、お、おっきいのが挿入<sup>はい</sup>ってきますわ!! ひおっ！ おほおおっ！」

本能に支配された男を止めることなどできはしない。肛門を拡張しながら、巨棒が櫻子の体内へと潜り込んできた。初めての体内異物挿入。しかも排泄器官への圧力に、令嬢搜

査官は痛々しい程に瞳を見開いた。開いた口からは獣のような悲鳴が漏れる。

「やぶっ、破れるっ！ わ、たくしのか、らだが……ひはーひはーひはー……破れてしましますわぁ」

まるで身体に大きな穴を空けられているかのようなうだつた。腸壁が押し広げられ、内臓が圧迫される。信じ難い感覚に、何度も櫻子は首を左右に振って「抜いて、ぬ、きなさいっ!!」と声を上げた。

「抜きなさいじゃないでしょ。貴女は立場つてものが分かっていないんですか？ これは貴女の仕事でしょ」

するとそこに細川の容赦ない言葉が向けられる。上に立つ者に必要なのは責任感だと散々父親に教え込まれてきた櫻子にとっては、一番痛い言葉だった。

「そ、そんなこといわれま、してもっ！」

とはいえ、辛いものは辛い。どこか救いを求めるような視線を細川へと向けてしまう。

（あ、わ、笑ってる……。わ、わたくしを見て……。ほ、細川が笑ってる……）

そんな自分へと向けられる彼の口元には、笑みが浮かんでいた。所詮お嬢様にはこの程度のこともできない——そう嘲笑うかのような表情。櫻子にとっては最も屈辱的なものである。

（ま、負けられない。こ、こんな奴に負けられませんわ）

弱気になっていた心が立ち直っていった。この程度はこなしてみせなければならぬ。

「し、失礼……はあーはあーはあー……い、致しましたわ。ど、どうぞわたくしの身体を、た、のしんで下さいま——んほおっ！」

「プジュツと肉棒が膣奥を突く。排出器官への刺激に、言葉は途中で止まった。  
「そんなに言うなら楽しんでやるよっ！」

じゅばんっじゅばんっじゅばん！

男はまるで容赦などしてくれない。アナル処女を失ったばかりの肉体だというのに、何度も激しく腰を振り、ペニスを肉奥へと打ち込んできた。

「くひっ！ おっ！ おっおっおっおほっ！！ しっり、わたくし、おっしりが、ひ、らく。か、つらだに、穴が空いてし、まいまつすわっ！ くほおっ！」

ピストンを受けるたび、櫻子の身体は何度も揺れる。結合部の肛門は痛々しい程に広がり、肉棒が引き抜かれていくたびにピンク色の柔肉が外側に捲れ上がるのが見て取れた。

感じる苦痛。が、与えられる感覚はそれだけではない。指でした時と同じ——いや、それ以上の排便時に似た快感を櫻子は感じていた。

（や、いやっ、う、うんち……わたくし……うんちしてるみたい……）

ピストンを受けるたび、甘い愉悦が身を襲う。

「何だ？ 気持ちがいいのか？」

ポウツと桜色に染まっていく頬。それを見た男が笑った。

「ち、ちがつ、き、きもちよくなんつか……ほおっほおっ……あ、ありませんわ!!」

必死に櫻子は男の言葉を否定する。人として認めるわけにはいかない。排便の穴で感じていると悟られるなど、櫻子の矜持は耐えられなかった。

「嘘つくなよっ！ ほらっほらっほらあっ！」

ばっちゅんばっちゅんばちゅんばちゅん！

「ひぎっ！ ま、またはっげしっく！ むひっ！ ひーひーひーひー！！」

だが、そんな櫻子を氣遣うことなく、男がピストン速度を上げる。しかも、挿入された肉棒はただ前後に動くだけではなかった。挿入がされるたび、大きさを増幅させていく。当然直腸にかかる圧力は増していき、感じる肉悦も大きくなっていった。

「おーおーおーおーおー」

四つん這い状態を支える腕が震えだす。鷹文から受けた愛撫以上の愉悅を感じ、全身から力が抜けていった。

（駄目よ。こ、これはし、ごとなんだから……わた、わたくしは、わたくしは耐えな、いと……だつめ。また、あのと、きみたいに、くる。何かきて……わた、わたくし、わたくししいい……）

絶頂感が広がっていく。櫻子は何とかそれを耐え抜こうとした。が、そんな彼女を嘲笑うかのように、肉棒は更に大きさを増す。亀頭がパンパンに膨れ上がっているのが肉壁を通じて分かる。ピクピクと膣内でペニスが痙攣をし始めた。

「も、もう限界だっ！」

男が限界を告げる。

「や、だ、だめ——」

慌てて櫻子はそれを止めようとした。この状態で射精されたらどうなってしまうか分からない。鷹文を相手に風呂で覚えた絶頂感を考えると、恐ろしささえ感じた。

「い、いまっは、だ、だめ！ も、もう少し、ま、まって——」

少し待ったところでどうにかなるものではないけれど、男を止めようとする。だが——  
びゅぶっ！ どびゅっ！ どっびゅどっびゅどっびゅどっびゅゆるるうっ！

「んほおっ！ ひっひっひいっ！ で、射精<sup>で</sup>てるっ！ おっおっ！ あ、あつひの、熱いのが、わ、わたくしのなっかで、でてるうっ!!」

射精は始まってしまった。直腸内に多量の白濁液が撃ち放たれる。下腹部に凄まじい熱気が広がっていくのが分かった。体内に熱湯を注ぎ込まれているかのような感覚を覚え、櫻子の視界は真っ白に染まる。

（いや、駄目！ 駄目なのっ！ 止まって、止まってえええっ！）

肉体が快楽に押し上げられていく。必死にそれを押しとどめようとするのだが——

「あひっ！ ほおっほおおおっ！ だっめ、駄目なのに、だっめですのにいっ！ い、いっく！ わた、わたくしも、いっぐうううっ！」

絶頂感が全身を包み込んでいく。令嬢捜査官は口を半開きにして、背中を反らし、身体を小刻みに震わせながら達していた。



## 第七章 事件の黒幕

細川逮捕から一週間が過ぎた。彼の取り調べは鷹文が担当している。これは櫻子も事件の被害者であるという点を考慮しての判断だった。正直不満がなかったといえれば嘘になる。とはいえ、細川逮捕自体はできたのだ。

「やっぱり最後に勝つのはわたくしよね」

落ち込みからも立ち直り、櫻子は勝ち誇る。ただ、同僚達との距離は以前より開いてしまっていた。事件で見せてしまった痴態。仲間の視線に好色そうな色が時折混じるのを感じる。鷹文とも会話をまったくしていない。彼の方からは話しかけてこようとしていたが、櫻子が完全に無視をしていた。

「い、いいんですか……ほ、本当に……」

心を開くことができるのは良介だけ。自分を案じる彼の表情が愛おしかった。櫻子は「構いませんわ。貴方がいれば」と言っつてキスをする。良介は恥ずかしそうに笑った。

どこからどう見ても愛し合う恋人同士のような姿。彼を屋敷に招待するのは自然な流れだったのかも知れない。

「ここがさ、さ、櫻子さんの部屋ですか……すす、凄いです」

「櫻子の私室——というよりも鳳凰院家敷地内に作られた櫻子の屋敷に通された良介は目

を見開いて口をポカンとしている。櫻子の私室は大きな家の居間くらいの広さがあった。しかも二階層に分かれている。その上、例の応接間に、櫻子専用のキッチン（ただし絶対に櫻子は料理をしない）、櫻子専用の大浴場に、櫻子専用の庭、櫻子専用のプール、櫻子専用のヘリポートまで用意されている。

良介が呆然とするのも当然のことだった。

「この程度普通のことですわ。さ、こっちへ来なさい」

驚く良介に白いブラウスに黒いスカート姿——仕事帰りの寛いだ服装のお嬢様が命令を下す。自分の言葉に従うのは当然だと言わんばかりの態度だ。実際良介は文句も言わずついてくるのだが……。

「こ、ここは？」

「見て分かりませんか？ わたくしの寝室ですわ」

室内に置いてあるのは天蓋付きの豪華なベッド。寝室以外の何もものでもない。

「そ、それは……わ、わわ、分かりますけど。な、何でし、寝室に？」

どこか良介は落ち着かない態度だ。ゴクリッと喉を鳴らすのも見て取れる。そんな彼に對して、櫻子は口元に妖艶な笑みを浮かべた。

「……貴方の想像している通りの行為をする為ですわ。分かっていますでしょ？」

そのまま良介の返事も聞かず、彼に唇を重ねる。ただ口唇を重ね合わせるだけのキスではない。自分の舌を良介の舌に絡めた。

ちゆず、くじゆる……ちゆずるう……。

汚い唇を吸い立てる。なんと臭く、なんと粘ついた唇なのだろう。グロテスクとさえ形容できる。けれど、それが愛おしい。キスをしているだけで悦びに身体が震える。

「んふ、ふんらん、んふう……はあ……こういう……行為ですわ」

自らベッドに良介を押し倒す。彼に対して櫻子は妖艶に微笑みかけた。

「……いい、いい、いいんですか？」

遠慮がちに問いかけてくる良介。だが、彼の股間は間違いなく熱く勃起していた。ズボンの上から手を添えたので、それがよく分かる。

(勃起してますわ。良介の……あの汚いペニスが……)

彼の肉棒を思い出す。包茎で情けないけれど大きなペニスだ。酷い悪臭が放たれる肉棒。恥垢もべつとりだ。あんなものを自分の身に導けば、こちらの身体まで腐ってしまうかも知れない。だが、そんな陰茎のことを思い出す程に、櫻子の身体は熱く火照っていく。肉体がペニスを欲し、欲情していた。

「構いませんわ……。これはその……れ、礼ですから。わ、わたくしを手助けしてくれたことに対する、その……褒美ですわ」

欲しい。肉棒が欲しい。良介が欲しい。肉体が強く訴える。

強がりながらそんな本能を愛しい彼に訴えた。顔は真っ赤に染まる。まるで少女のような表情だった。

そんな顔のまま、良介の返事も聞かずに彼の肉棒を取り出す。ビョンツと勢いよく飛び出る予想通りの包茎ペニス。やはり醜い。前に口奉仕をした時に散々舐め取ったはずなのに、もう肉棒は恥垢塗れになってしまっている。

（あ、や、やっぱり臭くて……汚いですわ……）

それを見つめて櫻子もゴクリッと喉を鳴らし、自らスカートを捲り上げ、ショーツを脱いだ。剥き出しになる陰部。そこは既に濡れそぼり、膣口はクパッと開いていた。

「いきますわよ……んんっ！」

クチュツと音を鳴らしながら、ペニスを挿入していく。

「さ、櫻子さん」

愉悦混じりの悲鳴が良介の口から漏れた。その口を再び唇で塞ぐ。口唇を重ね合わせたまま、肉穴でペニスをより啜え込んでいった。

「あ、熱いですわ。そ、それに、す、凄く大きい……あっあっあっ！ 硬くて、気持ちいいですわ!!」

蜜壺が満たされていく。子宮口に口付けをする肉先の感触に、すぐに櫻子は悦びの声を上げた。これまで与えられてきた快楽とは明らかに種類が違う。ただ肉棒を挿入しただけだというのに、幸福感を櫻子は覚えていた。

セックスに対する躊躇いはない。男に対する嫌悪感が残っているし、この先も消えないだろうけれど、良介は別だった。彼がいたから今の自分がある。だから、彼にだったら自

分の肉体を捧げてもいい。

ずじゅっずじゅっずじゅっ！

「ふんっふんっふんっ！ あ、当たってます。お、奥に当たってますわ!! いい、いい、気持ちいいですわ！」

素直に自分の気持ちを出す。陵辱で与えられる快感の比ではない。数度しか腰を振っていないのに、すぐに達してしまいそうだった。

ぐじゅっ、ぶじゅぐっ！ ぐじゅっぐじゅっぐじゅっぐじゅっ！

女を犯す男のように腰を振る。男など最低な存在だったはずなのに、良介との交わりは心が満たされていくみたいだった。結合部で何度も肉棒を締め上げる。

「どっう？ き、気持ち、い、いいっ？ あっあっあっあんっ！ わ、わたくしは、わたくしはいいわっ！ 凄く気持ちいい♥ 良介のチンポが気持ちいいの!! わたくしのオマンコが悦んでるの♥」

淫らな言葉を口にすることも躊躇わない。寧ろ積極的に口にしていった。

（わたくしを見て！ 淫らなわたくしを！ 良介、良介、良介！）

結合部からダラダラと涎のように愛液を垂らす。喘ぎ声を上げる口端からも、涎が垂れ流れていた。全身が汗に塗れる。クイッククイッと腰を振りながら、良介の肉塊みたいな身体を抱きしめた。

「っ、繋がって、ま、っすわ。良介のか、身体と、わたくしの身体が、い、一緒になって。

んひっ！ き、キスしてまつすわ♥ し、子宮に、りよ、良介のチンポがキスしてますわあっ！ んあっ！ んああつ、んあああつ！」

汗と汗が交わり合う。コツツコツツと子宮口を肉先が叩くたび、櫻子の全身は震えた。交わりの愉悦に溺れながら、何度も何度も唇を重ねる。積極的に良介の唇を吸い、唾液を交換し合った。お嬢様の美しい顔が唾液に塗れていく。

「ああ、櫻子さん！ 櫻子さんっ！」

自分の名前を良介が呼ぶ。それが嬉しい。

「良介っ！ あっあつあああつ！ 良介え♥」

だから櫻子も彼の名前を呼んだ。一言一言を口にするたび、肉体の昂ぶりが更に大きくなっていく。女体を包み込んでいく悦楽を止めることなどできなかった。

ばじゅんっばじゅんっばじゅんっ！！

腰を突き込むたび、愛液が飛び散る。

「あーあーあーあーあー」

陰部が疼いた。子宮が子種を求めて下がっていく。お嬢様の肉体は絶頂に向かって駆け上がっていった。甘ったるい発情臭が部屋中に広がる。

「い、イってしまいます。わた、わたくし、もう、もうイって——んんっ！」

「ぼ、ボクもです。で、射精ちやいます。射精しちやいます！」

二人の快感がシンクロしていく。白い肌がピンク色に染まった。膣中の肉棒は射精に向

けて何度も震えだす。

「射精しなさいっ！ あっあっあっ！ わた、わたくしの、わたくしの膣なか中に貴方のセーシを射精しなさいっ！」

ごく自然に膣内射精を命じていた。良介の精子を膣奥で受け止めたい。子宮を白濁液で満たして欲しい——本能の訴えを退けることなどできなかった。

(良介の……だったら……)

考えるだけでキュンッと膣壁が収縮する。射精が近いのを感じ、より激しく腰を振った。一振りごとに飛び散る愛液。ギシッギシッギシッとベッドが何度も軋んだ。そして——

「で、射精ますっ！」

どびゅっ！ どつびゅどつびゅどつびゅどつびゅゆるるうっ！

「くひっ！ んんんんっ！ は、入って、き、ますわっ！ わたくしの膣中に、あ、貴方の熱い……熱いセーシが！ あっあっあっ、い、イクッ!! わ、わたくしもイクウッ！」  
流し込まれる精液の熱気が、お嬢様の肉体を絶頂まで導いていく。良介にのし掛かったまま櫻子は背中を反らせ、達した。トクントクンとペニスが脈動するのを感じながら、幸福感に包まれていく。弛緩していく肉体。ゆつくりと上半身を倒し、身体を良介に預けた。その状態で再び口付けを交わす。

「……い、一度しか言いませんから……はあはあ……よく聞いておきなさい……」

「な、何ですか？」

彼の耳元でそのまま囁いた。

「……貴方を愛してますわ。貴方がいなければわたくしはもう駄目だったかも知れない。本当に感謝してますわ。ありがとう……」

誰かに対して素直な気持ちを口にするなど、初めてのことだったかも知れない。

\*

「で、この男は誰なんだ？」

ヒクヒクと父親の眉が震えている。その態度だけで、剛蔵が怒っていることは櫻子にもすぐに分かった。だが、だからといって引くわけにはいかない。

「誰って……同僚の沼沢良介さんですわ」

場所は剛蔵の私室。ソファに座る父の前に櫻子は良介を連れて来ていた。良介はガチガチに緊張している。何だか微笑ましい姿だ。

「そ、その沼沢君をどういった理由で連れて来たのかな？」

「理由？ 聡明なお父様ならお分かりでしょ？ わたくし決めましたの。この良介と結婚致しますわ」

普段とまったく変わりない口調で、サラリと宣言する。同時に父親の前で良介と腕を組んでみせた。

「……な、何を言ってるんだ櫻子……し、正気か？」

剛蔵は当然のように驚く。と同時に、すぐに顔が真っ赤になった。

「相談もなしに結婚する？ そんなこと本気で考えているのか？ 櫻子……お前は、ほ、鳳凰院家の跡継ぎなんだぞ！ そ、それに……そ、そんな醜い男と……」

剛蔵が櫻子を怒ることなどほとんどない。多分ここ十年はなかったはずだ。その剛蔵が怒鳴り声を上げている。だが、櫻子はまったく動揺しない。父の怒りなど織り込み済みだった。

「きつとお父様ならそう言うと思っていましたわ。確かに……相談もなしというのは謝ります。それに……こう言うては何ですけど、お父様の言う通り良介は醜いわ。でも……愛していますの。わたくし、良介がいなくてもう駄目なんですの。それを、今ここでお父様にも証明致しますわ」

父に対して宣言すると、櫻子は父の前でも躊躇うことなく良介にキスをする。

「櫻子っ！ お、お前、な、何をっ!？」

唐突な行為に剛蔵が驚きの声を上げた。が、櫻子は止まらない。父の声など無視して、良介と深く舌を絡ませ合い、唾液を交換し合った。

くちゅ、くちゅぐつ……ぐちゅるるう……。

（見てる。お父様がわたくしを見てますわ……。視線を感じる。お父様に見られて、は、恥ずかしいのに、止まりませんわ）

キスと同時に、一瞬躊躇いつつも良介の股間をまさぐる。

（こんなことだつてできますわ、お父様。わたくしは心から良介を愛しているんですから）

父親の前でこんな行為をするのは恥ずかしいに決まっている。だが、良介に対する愛はそれ以上に大きい。躊躇なく肉棒を取り出し、何度も手で扱き上げた。すぐに先走り汁が溢れ出す。

「こ、ここ、こんなところじゃ……」

「構いませんわ……。お父様、よく見ていて下さいね」

そう言って父親に対して向けた櫻子の笑顔は、娘ではなく女のものだった。

（できますわ。たとえお父様の前でも、良介となら何だってできますわ）

立ったまま良介と向き合い、スカートを捲り、ショーツをずらす。そのまま自らの膣奥に、良介の包茎ペニスをグブジュツと挿入していった。

「んっ！ くふっ……あっああ……は、いってますわ。お、お父様、ち、ちゃんと見ていますか？」

足を下品な蟹股に開く。背後からでも結合部が丸見えだった。

「な、何を、何をしている櫻子……」

剛蔵はあまりの事態に身動きもとれないようだった。

「なに？ み、見れば分かりますでしょ？ あっあっあんっ！ せ、セックスですわ。わ、わたくしのマンコに、良介のチンポを突っ込んでいますの……んんんんん！」

幼い頃から優しかったお父様。常にわたくしを大事にしてくれたお父様。どんな時でも味方でいてくれたお父様。将来はお父様のお嫁さんになると言ったこともある。そんなお

父様の前で、自分は腰を振っていた。

じゅずっじゅずっじゅずっじゅずっじゅずっ！

「あ、当たってますの。わたくしの子宮に、良介のチンポが当たってますの！ す、凄く気持ちがいいですわお父様!! わたくし、良介とのせ、セックスが大好きですの!」

溢れ出す愛液がポタポタと床に落ちていく。水溜まりのように牝汁が広がっていった。いつも以上に分泌液が多い。父親に見られているせいだろうか？

「あ、も、もうイって、イってしまいますわっ♥ お、お父様の前なのに、き、きて、きてしまいますっ!」

ただでさえ心地いい良介の肉棒。そこに父親の前でという異常状況が重なる。すぐに櫻子の肉体は上り詰めてしまう。自ら腰を左右に振りつつ、子宮口で肉先にキスをした。

「射精して! お父様の前で、わたくしの膣中にセーシ射精してっ!! わたくしを受精させてえっ! んんんっ! くひっ! き、きった、セーシきたああっ♥」

膣内で肉棒が震えだす。吐き出される白濁液。子宮内が熱汁で満たされていく。膣内射精された精液が、父親の前で結合部からブビュッと溢れ出た。

「孕んでしまいますわ。お、お父様の前で赤ちゃんがでちゃいますわあ……」  
潤んだ瞳が蕩ける。半開きになった口から「はあああ」と甘い吐息が漏れた。

「さ、櫻子……な、何故……」

震えた声で呟く父。その言葉がどこか遠くに聞こえた……。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 本体690円(税込)

全国書店で  
**好評発売中**



**「…藤田君は責任取るべき」**  
陸月への想いに身を焦がすマキナ  
彼女は夜の教室で……!?

小説…さかき傘 / 挿絵…天海雪月

**思春期なアダム3** 一人泣きの子猫

全国書店で  
**好評発売中**



**女幹部メル様の  
セカイ征服計画!**

小説…高岡智空 / 挿絵…鈴眼依縫

不死の吸血姫がDSのご主人様を募集  
しているようです

小説…酒井仁 / 挿絵…にのこ

悪の秘密結社vs正義のヒーロー  
イケない戦いの記録!

全国書店で  
**好評発売中**



**「当方Mドレイ希望」**  
魔界最強のプリンセスがドレイ志願!?

小説…酒井仁 / 挿絵…にのこ

**不死の吸血姫がDSのご主人様を募集**  
しているようです

- 既刊LINEUP**
- 山獄学園戦姫 / ノナガ! ①～③
  - 均瀬 / 帝都少女探偵団 赤い罠路を掌て!
  - BLANGEL 輪になりにて踊る患者の夜
  - 借金お嬢クライス ①～③
  - プリンセスバニシ / 文籍する美咲と魔姫
  - 無敵の姫騎士がDMに目覚めたようです
  - ビルグリムメイデン ①～②
  - 呪詛喰らい前 / カースイーター
  - 魔海少女ルビエル



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

**ヴァルキリエ**

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

**cranberry**

<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・cranberryをよろしく!!

**mille-feuille**

<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

**モバイル二次元ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!